

長期予測WGの総括と今後の方針について

1. 長期予測SG

目的：火山活動の現状の評価手法、長期的な予測手法を検討する。

総括：ケーススタディ火山について、各火山の階段ダイアグラムを中心に公表された資料の収集を行った。既存の公表された調査資料を活用するが、動燃資料では細部の検討ができないこと、火山学会・史料火山学WGの資料については刊行時期が未定であることが分かった。ケーススタディ火山として、雲仙岳などの階段ダイアグラムを収集するとともに、雲仙岳や伊豆大島の活動内容を検討した。

今後の方針：

- 1) 次の2年では、活動の評価・予測の手法の議論を行うための観測・監視のあり方を議論する。(大学等が開発したノウハウをどのように監視に使うか、という観点を含めて。)
- 2) 火山の活動に関する基礎的データを収集する。(火山学会・史料火山学WG資料の入手も含める。)
- 3) これまでの、そして、これからの基礎データを用いて、ケーススタディとして良くわかっている雲仙岳、伊豆大島について、活火山総覧の改訂版を作成して見る。これに合わせて他の火山の作業を進める。

2. 火山情報SG

目的：噴火の予測が行われた場合に、どのような内容と方法で情報を発表すべきか、を検討する。

総括：外国の情報発表の事例について勉強し、外国では火山活動のレベル化、警報としての発表、有効期間の設定などの社会的対応に配慮した措置がとられている事例が認識された。

今後の方針：

- 1) 火山情報は、そもそもどうあるべきか、を噴火予知連として2年でまとめて気象庁に提言することとしたい。
- 2) 86活火山の活動レベル分けを行い、それがエスカレートする段階でどう情報に盛り込むか、などの検討。

3. 活火山SG

目的：追加すべき活火山について評価・検討を行う。

総括：平成3年に見直しがなされた活火山の定義に該当する火山を検討し、羅臼岳・燧ヶ岳及び北福德雄の3火山を活火山として追加認定した。

今後の方針：

- 1) 当面は今の基準で検討すべき火山が出た場合に検討する。
- 2) 活火山の定義について議論する。